

論文

「クルアーン」が教える人間洞察（第1回）

アフマド鈴木紘司

地域文化学会理事、マレーシア現地法人役員

アフマド鈴木紘司さんは、エジプトのアズハル大学（イスラーム高等学部）を卒業後、長らく住友商事に勤務され、業務本部、中近東事務所長を経て、東洋大学法学部非常勤講師、NHK衛星放送部アラビア語同時通訳、アラブ・イスラーム学院常任顧問、ミンダナオ自治州経済顧問など多くの業務に携わり、現在は日本とボルネオ島、マレーシア、サバ州を結ぶ活動を続けておられます。

イスラーム教徒として活躍してこられた鈴木さんの眼から見た独自のイスラーム解釈と聖典クルアーン研究を、数回に分けて、掲載いたします。私たちの生き方にも参考になることが多いかと期待されます。（塩尻和子）

序文

コロナ禍の現在、汚染状況を地図上で追うと新たな世界地図が確認できます。見えないコロナウイルスが強制的に作り上げた不可思議な視座です。コロナ患者数は、伊、英、西、仏、露の欧州大陸を中心に南北アメリカ大陸の全域に拡大しました。いずれも欧州文化が色濃く反映している地域であり、反対に比較的少ない地域がアジア諸国であるのも興味深いことです。中間に広がるインド・アフリカ大陸文化圏の色染めも次第に鮮明になっていきます。

コロナ禍は人間の生命に直接影響を与え、全世界の人々の行動を著しく制約して、各国の政治、経済、社会全体に甚大な変化と異常

状況をもたらしました。今回の特殊性はグローバルの言葉に伴い広がった病原体が、国境を越えて地球全体に浸透した事実です。その病に蝕まれてから人々の思考や行動が変換、転向しています。

コロナ以降で注目されるのが、米国と中国の対立構図です。これは第二次世界大戦後の米国とソ連による冷戦対立より深刻と憂慮する向きが多く見られます。何故なら米露の冷戦は同じ文化圏に属する西洋の大同団結のイデオロギー的競合と捉えられ、根底には18世紀以降に確立した「ナショナリズム（国民国家主義）」の確執に要因を見出せました。

しかし米国と中国がコロナ禍の以降に対立する構造となれば、洋の東西を分断する異質の人種的、文化的抗争に至る危険性が懸念されます。それゆえに中間に位置するユーラシア大陸のインドと中東から世界を大局的に俯瞰してみることも重要となります。古来、インド文化は仏教を通じて、中国、日本、タイ、ミャンマー、などのアジア諸国へ伝搬して大きな影響を与えました。同様に中東文化は啓示宗教を通して西洋思想に深い足跡を残しました。例を挙げれば、西洋と東洋の差異は「チェスと将棋」のゲームの中に見出されると言います。このゲームの原型はインド発で、西洋へ行って「チェス」となり、東洋では今人気の「将棋」となりました。チェスは奪った駒すべてを殺しますが、将棋はそれを生かして活用し、捕虜を再度、使うという差が生まれています。世界最大の人口を誇る中国とインドにおいてコロナ禍の分布地図が今後どうなるか、その帰趨も注目のポイントです。

地図上に視座化できるコロナ図の分析は、グローバル化の問題と文化圏の側面を対象としますが、興味深いのはこれまで文化の底流と見做されてきた世界の宗教につき、コロナが特に選り好みをしなかつた事実です。カトリック教国のイタリアを筆頭に、キリスト教圏の国々が甚大な被害を受けましたが、中東でもイスラーム・シーア派宗教学者が政権を担うイランに広がり、ユダヤ教を国是とするイスラエルも感染者が増大しましたし、インドにも被害は拡大しま

した。よく考えれば、各宗教が持つ特徴である、人が集まり、人に寄り添う宗教儀式をコロナウイルスが上手に利用して便乗し、伝染拡大を図ったともいえるでしょう。コロナ禍は、世界の人々の挨拶のやり方すらも変えさせ、手と手をつなぐ握手を止めて、日本でいう「肘鉄砲」方式へ変化させました。それにしても全般的にヨーロッパと南北アメリカ大陸に多く蔓延して、アジア文化圏が少ないのは何故でしょうか。人口密度が低い新大陸のオーストラリアやニュージーランド、孤立した島国の場合には理解できますが、人口が過密のアジア諸国に少ない原因の解明は必要です。今般のコロナは心の深層面で社会へ影響して世界に大変換をもたらしていますが、中東を始め、東南アジア諸国のマレーシア、インドネシアから、全世界へ影響を与え続ける稀代の書物「聖典クルアーン」を改めて見直しました。21世紀の現時点に立脚して「クルアーン」が明快に語る世界観の一部を取りまとめ書き下ろすことが、コロナで生死の境をさまよった筆者の使命と解したからです。

本論文では、これまでアラビア語に接する機会、時間、余裕がなかった日本人読者にアラビア語でしか読めなかつた「クルアーン」を直接に読んで理解をして頂けるように工夫しました。

第1部：クルアーンの概要を知る

1－1 クルアーンとはどんな書物か。

世界の古典でも「クルアーン」の位置づけは、かなり特異な存在と言えます。通常の古典ならば機会ある毎に書棚から取り出して、過去の時代に生きた著者が書き遺した内容に触れることになります。しかしクルアーンの場合は現在 21 世紀の日常生活でも人々が実際に毎日、朗誦しており、その内容が生活の指針となっています。「聖典クルアーン（中国語：古蘭經）」の記録は 1,400 年前の 7 世紀ですが、その誕生から完結までが 610～632 年の 23 年間と正しい確証があります。日本では飛鳥時代にあたり推古天皇の摂政、聖徳太子（574～622）の時世です。記録書であるクルアーンはアラビアの聖地マッ

カで 570 年頃に誕生した「ムハンマド」という人が語り出した不思議な言葉の集大成なのです。ムハンマドの生涯（570～632）は聖徳太子と殆ど重なり、ムハンマドの方が 4 歳年長でさらに 10 年長生きしています。

クルアーン原典には他宗教にあるような種類の異なる経典や、異本、外典が一切ありません。イスラーム基本原理の「唯一性」に即して、完全に「唯一無二の聖典」であり 7 世紀から一字一句も変更されずに今日まで継承されてきました。その上に人類滅亡の日まで修正が一切許されない希有の書物なのです。クルアーンの定義とは「唯一神アッラーの奇跡の言葉であり、預言者ムハンマドの上にアラビア語で下された言葉を書き記し、書物として読誦することが神を崇める行為となる」です。

「クルアーン」誕生の経緯は以下のとおりです。

西暦 610 年にムハンマドは不惑の年 40 才を迎えて、幸せな家庭を守る商家の主人として平穏な日々を過ごしていました。子宝も授かり 4 人の女児は無事に成長しますが、男児 2 人は夭折しています。マッカでの社会生活を静かに送り、その人柄ゆえに「正直者（アミーン）」のあだ名で呼ばれました。ところがその頃からムハンマドに不思議な兆しが訪れ、思考に耽ける時間が多くなったのです。孤独を求めてマッカの町を離れ、北東約 5 キロにそびえる釣鐘型の独特な形状をもつ「ヌール（光）山」へ水と食料を携えて登るようになります。頂上には大きな岩盤が重なり自然にできた洞穴があり、人ひとりが起居できる手頃な広さでした。人里から離れた山頂は昼でも風の音しか聞こえず、夜は静けさに押し包まれ、神気に満ちた厳肅な場所です。誰もいない静寂な山頂の洞穴で吹きすさぶ風音を聞きながら、不可視の世界や人間の存在意義に思いを馳せるには絶好の環境でした。ある夜半に、その洞穴で奇妙な体験に見舞われたのです。山頂に一人でいたムハンマドに奇妙な事態が発生しました。突然に何者かが喉元を強い力で押さえつけ命令したのです。息が詰まり苦しい中で「読み、読みなさい」と命じる声が聞こえ重々しい言

葉が投げ掛けられました。動悸が激しく脈打ち、心臓は高鳴り、恐怖で震えつつ何とかその言葉を復誦し終わると何者かは去り、ムハンマドの脳裏に不思議な文章が明確に残されていました。自分以外に誰もいない山頂で、他者から言葉を与えられるという初めての体験でした。この異常体験に驚愕したムハンマドは体験した現象に恐れおののき、熱に浮かされた状態で自宅へ帰り着きました。そのムハンマドを励ましたのが年長の妻ハディージヤであり、彼女は従兄弟のネストリウス派キリスト教徒ワラクに相談をして、それが妖靈でなく天使からの「啓示」であることを認識させたのです。その啓示の全てを一冊にまとめ上げたのが「クルアーン」となったのです。

1－2、不思議な言葉「啓示」とは何か

日本語で聞く「啓示」は一見、易しそうな単語ですが日常生活にはほとんど現われません。辞書を引くと「さとし示すこと」の意味で、類語が「天啓、默示、お告げ、報せ」などです。すなわち人知で解らないことを神が与えて示した言葉と解釈されます。ちなみに漢字で、「示」部首と「申」を結合して「示し、申す」と繋げると＜神＞の旧字が得られるのも興味深いことです。アラビア語では「啓示(ワヒー：WHY)」、英語：Revelation,ですが、その定義は「万有の御主である創造主から降臨された文」となります。

中東世界では有史以来、日本でこそあまり馴染みのない「預言者」という特別な人間が、多く出現してきました。「預言者」とは未来の予言や占いを行う人でなく、文字通りに「言葉を預かった者」を意味します。神からの言葉を受けて預かり、人類へ伝達する特別な人を指すのです。旧約聖書に出てくる、ノア、アブラハム、イサク、モーセ、ダビデなどのヘブライ人たちで、各時代に現れてその頃の社会に適合する啓示を伝えてきました。それらの言葉を集めた本の典型が「旧約聖書」(ヘブライ語聖書)です。イエス・キリストもユダヤ人であり「新約聖書」によってキリスト教の始祖となりました。

6世紀に誕生したアラブ人のムハンマドも人類最後の預言者と公認

されました。中東の預言者には、我々が知る仏教の考えと一線を画した特別な人間観があります。仏教ではブッダも元は凡夫で厳しい修行の結果、すぐれた特性が具現されて人間を超える境地に至ったとされます。しかし中東の預言者はそうでなく、あくまで「神から選ばれた特殊な人間」との定義です。預言者は神に抜擢されなければなりません。その選定は神自らが行うので、人間の能力が及ばない領域に属します。預言者となるために自ら努力を重ね修行を積んでも駄目なのです。家系や血筋がよく、知力に優れ、財力があっても預言者には絶対なれません。それゆえに預言者は人々から崇敬されて特別な扱いを受けてきました。歴代の預言者には、歴史的、地域性から緊密な関連があります。重要な使命は、同胞で同じ言語を話すという共通点も強調されています。さもないとその民に説教し、納得させることができないという理由です。ユダヤ預言者にはヘブライ語、イエスはアラム語を話し、預言者ムハンマドにはアラビア語で啓示が下りました。日本ならば日本語で納得させる日本人預言者が生まれるという意味ですが、ムハンマドが人類最終の預言者との宣言があるため、残念ながら日本人から預言者はもう期待できません。

1 - 3 、啓示の詮索

この奇妙な出来事はすぐマッカの人々に知れ渡ります。それまで普通であった人間が或る夜を境に異様な言葉を吐き出したのです。誰よりも驚いたのがムハンマド本人ですから周囲の人間が仰天したのも当然でしょう。人々は勝手な憶測を交えて論議をはじめ、多くの意見を持ち寄って謎解きに挑戦しました。中でも砂漠の奥に棲み、たまに人里へ出て悪さをする「妖靈（ジン）」に取り憑かれたとする説が有力でした。また単なる「詩文」だと片付ける者も多くいました。詩人は即興で見事な言葉をつむぎ出すから見栄えのよい詩文の一種だと解釈したのです。論拠の背景にギリシャの詩神やアラビアの詩悪魔などの伝説がありました。しかし不思議な言葉が意味する

内容の重みは、詩人の言葉遊びや即興で作れるレベルではありません。さらには聖書を真似して書き上げた「作文」という常識的な判断を下す者もいました。クルアーン啓示の中に旧約聖書と同じような物語が多く見られるからですが、その内容には独自性がありました。その他にも「夢占い」に近いという解釈でしたが、夢はたいてい幻のごとく直ぐ消えます。しかしムハンマドに残された言葉は夢のように不確実でなく、正確な表現で内容も系統立ち、何よりもその後23年間も連続したのです。こうして奇妙な言葉が、他のいかなる文章とも異なる奇跡の言霊で、不可知な概念を伝える神聖な「啓示」と認知されていきます。これが7世紀の時代に詳細を記録して正確に残された経典です。

ムハンマドの場合は、過去の預言者の誰よりも言行が克明に記録され、完璧な形で収録されたという重要な事実があります。ムハンマドが受けた言葉は本人のみならず、周囲の人々も必ず聞いていたことが実証されています。初期の言葉は家族メンバーだけの少数が耳にしましたが、次第に多くの人たちに聴取され、その文章は直ちに記憶され書き留められました。複数の人々が記憶して同時に記録することで内容の信憑性は極めて高いものです。それゆえにクルアーンは経典としてのみならず、歴史資料の価値を充分に備えています。降臨したクルアーン文章は他の一般のお告げ類とは全く性格が異なり、内容が具体的で明解な上に体系的に現実に立脚し23年間にわたり継続して下されました。そしてクルアーン最大の特徴は、信徒にとっては導きの書であり、不信者に対しては警告の書ということです。このいずれを選択するかは一人ひとりに任されるのです。

1 - 4. 預言者たちの奇跡

これまでキリスト教の「新約聖書」や「旧約聖書」を読んだ方は多いでしょうが「クルアーン聖典」に接した人は比較的に少ないと思われます。しかし「新・旧聖書」と「クルアーン」は姉妹関係にあり、クルアーンは「聖書など以前にあった啓典類を確証するため

に下された」との存在理由を何度も宣言しています。こうしてユダヤ教、キリスト教、イスラームはいずれも中東の同じ風土、環境から誕生した姉妹宗教なのです。いずれも啓示を基本とするので「啓示宗教」と呼称しますし、また創造主である唯一神を崇めることから「一神教」とも呼んでいます。既述のように中東の預言者はあくまで「神から選ばれた特殊な人間」という定義ですから、その選定を神が行い、神に抜擢されたという証拠を示さねばなりません。

預言者は神より賦与された徵（しるし）として一般常識を超越した「奇跡（ムウジザ）」を人々に見せる必要があります。旧約聖書にある奇跡では、モーセが投げた杖を蛇の姿に変えたこと、手首を白く変色させたこと、等の実例を挙げています。これらは視覚へ訴えるもので、「感覚的な段階に属する奇跡」とされます。キリスト教では新約聖書に見るよう、イエスが処女マリアの懷妊で誕生したこと、不治の病人の治癒、死者の蘇生など、その時代を反映して人間の肉体に伴う事象を挙げています。イエスのこれらの奇跡はすべて「生物学的な段階の奇跡」に分類されました。

それと比較して預言者ムハンマドが行った奇跡は何であったのか。それは学者たちが一致して認める「クルアーン」の啓示そのものであり、「知的な言語による奇跡」と認定されています。人間が言葉を使い知性を発達させたとの事実から演繹して、ムハンマドへ特別に与えられた「啓示の言葉」そのものが奇跡という理解です。クルアーンは奇跡の言葉を集大成した聖典であり、その証拠として古今アラブ世界で「クルアーンと同等の素晴らしい文章を作ることは不可能」という事実を挙げています。またイスラーム神学を「言葉の学問（イルム・ル・カラーム：‘Ilm al-Kalām）」と命名したごとく文字通り「イルム＝学問、知識」、「カラーム＝言語、ことば」であり、言語による思弁的、論理的手法で絶対者を探求することです。神の言葉（ロゴス）、すなわち「クルアーン啓示」の言葉を対象として研究する学問なのです。人間だけが使用を許された「言語、言葉」を用いて「神の概念」を詳細に知ろうとする学問です。クルアーンを

吟味してすぐ判るのは、最初の単語が「読め（イクラア：iQRa'）」と命令されたことで、これはムハンマドが命令を受けた「受け手、聞き手」の立場です。すなわちムハンマドは、命じられた言葉を受けて預かるだけの存在に過ぎないのが明白です。受けた言葉を伝達することを強調する他の証拠に、命令形動詞「告げよ（クル：Qu1）」があり、これはクルアーンの中で300回以上も使用されています。実際にこれら表現はムハンマドが特別な状態に陥った後に命令され、語った言葉であることを証明しています。ですから「クルアーン」を人間ムハンマドが書いたという理解は誤りであり、クルアーンの著者はムハンマドではなく、神であるとの事実認識が必要です。特別な言葉「啓示」の源泉こそが、人間を含む万物と全世界を創造した絶対者である神だという解釈に至る訳です。

「創造主」について言葉で表現するときは、一般的な神を表すアラビア語の「イラーフ（ilāh）」に定冠詞「アル（A1）」を付加して「アッラー（Allāh）」という単語となります。これは英語の「the God」に相当する普通名詞で「絶対唯一神」の意味と同じです。神の固有名詞ではありません。こうした特別な言葉がアラビア語で降臨し、声に出して読誦することにより今を遡る1、400年前の神の言葉に直接触れられ、その時代の素朴な信仰心を認識できるのが「聖典クルアーン」なのです。

1 - 5 , アラビア語の重要性

クルアーンがアラビア語で啓示されたことは、特に強調される重要な特徴の一つです。アラビア語は砂漠の中で単独に生まれた言語でなく、古代から文明を開花させたオリエント文明の担い手「セム民族」が話した最古の言語に属します。セムは「方舟のノア」の息子であるサーム（Sām）のことで旧約聖書の創生期で有名な「バベルの塔」の話までさかのぼります。世界の言語が一つであった太古の昔に人間は尊大となり、天に届くような塔を建て傲慢な態度を示したために神はその塔を破壊して人々を各地に散らせ、互いの意志が

通じないように言葉を違えたとされます。古代遺跡に刻まれた文字の解読が進むにつれオリエントの言語が互いに密接な関係を持つことが明らかとなり、今ではセム系言語を3つに分類しています。

- (1) 北東セム語群にはハンムラビ法典を記した、アッカド語、バビロン語、アッシリア語など。
- (2) 北西セム語群はユダヤ教の旧約聖書（ヘブライ語聖書、トウラー）を記したヘブライ語、イエスが話したアラム語、ローマ字を形成したフェニキア語など。
- (3) 南西セム語群は、聖典クルアーンの言葉、アラビア語、古代エチオピア語などがあります。

注目されるのは世界の聖典と云われる重要な書物が、全てセム系言語と深く関わっていた事実です。中でもアラビア語は広大なアラビア半島の砂漠に居住するアラブ族が用いた言語で地理的な孤立性から原始セム語の特性を純粋に保存しています。ですから聖書に紹介された有名な物語や神話がクルアーンに多く顔を出すのも当然ですし、言語を通して流れる文化的な背景がクルアーンの中に色濃く映されているのです。これまでアラビアに馴染みの薄かった日本人は、曲がりくねり打点の多いアラビア文字を見るとこれは花模様？火炎？ミミズ？と驚きますが、何万という漢字を判別できる日本人には、28文字しかない「アラビア文字」の習得は容易です。しかしアラビア語は日本語の性質とまったく対照的な局面に立つ言語です。

外国人学習者は日本語文章に主語を省く場合が多く、代名詞も、私、僕、俺、わたし、あたし、君、あんた、・・・・、数の数え方も、一戸、一冊、一個、一枚、・・・何のため必要なのか、漢字の読み方に至っては日本人でもフリガナが必要という不規則で論理が一貫せず、理屈でつきつめるほど解らなくなる難しい言語が日本語だと嘆きます。

アラビア語はその正反対の極致にあり、芸術的な花模様の一宇一

句、一記号までに厳密な検証がなされ、緻密で正確な理論構造の上に成立しています。アラビア語は世界で最も難しい言葉の一つとされ、万巻の文法書が存在しており、まるで数学理論のように体系が整備されています。例えば、動詞は「A B C、 E F G、 X Y Z」という具合に、3文字の組み合わせから成立します。この3文字の基本動詞の語幹に接辞を付け加えて、関連する派生語を造り出すのです。ちょうど玩具の積み木を重ね合わせるように一つの語幹から多くの語彙が一気に増産されます。この例こそが、動詞「読む（Q R A）」に接辞（A N）が付加され、名詞化されて「Q R A + A N = 読むもの」すなわち、「クルアーン」（Qur'an）となったのです。

ですから感性に富んだ日本語と、知性を中心に理詰めで思考するアラビア語の性格の違いを認識する必要があります。（次号へ続く）